

や怒られるんだから」

『そこはおれがうまいこと言い訳を考えてやるって!』

ライネは簡単にはあきらめてくれなかった。

自分の部屋に帰ってきたところで、そのしつこさにはいい加減うんざりして、ぼくはライネに言ってみた。本当はこんな意地の悪いこと、言うつもりなかったんだけど。

「ねえ、もしかしたら会ってくれないかもよ、師匠さん。

ライネがわざわざ会いに行ったとしても」

『なっ、なんだよそれ。そんなことあるわけねえだろ』

ライネの声の勢いが、すこしだけ弱くなった気がした。

ぼくはケータイの画面を見ずに続けた。

「だって、師匠さんが地球に追放されたのはライネが原因でしょ。そんな相手の顔、見たくもないって思ってるかも」

『いや、それはおれのせいって決まったわけじゃ……』

「けど師匠さん、日本に行くこともライネに教えてくれなかったんだよね。それってやっぱり怒ってたからだと思うんだけど。それに、もしそうじゃなかったとしても、大人気のアイドルをやめて、ライネの教育係に戻ってくれたりしないんじゃないかな」

この程度のことを言っただって、どうせまたライネはぎゃあぎゃあ言いかえしてくるに違いない。そう予想していたけれど、なぜかライネは黙ったままだった。

あれ、と思ってケータイの画面を見ると、ライネはぶす

っとした顔でうつむいていた。ぼくの言葉に、本気で落ちこんでしまったようにも見える。

予想外の反応にぼくがとまどっていると、部屋の外で「ノドカ、歯みがきちゃんとしたの？」と母さんの声があった。すぐやるよ、とこたえて部屋を出ようとしてから、ぼくは机に置いたケータイに声をかけた。

「ごめん、ちょっと言いすぎたよ」

ぼくが謝ってもライネの返事はなかった。

意地悪なことを言うんじゃないかなかった、とぼくは反省した。まさかライネがこんなに落ちこんでしまうとは思わなかった。だけど、会ってくれないかもとちょっと言っただけで、こんなに落ちこんでしまうのは、きっとライネが心の底から師匠さんに会いたいと思っている証拠だ。

ぼくは、ふう、とため息をついた。これはもう、しょうがないかな。明日を逃したら、次はいつ師匠さんに会えるかわからないし、家出中のライネが、いつまでぼくのケータイにいられるかわからない。それにこの調子じゃ、塾の宿題はどう頑張っても明日までに終わりそうにないし。

「……わかったよ。明日、浅草まで連れていってあげる」

『ほ、ほんとか!』

ライネのおどろきでケータイが飛び跳ねそうになった。

『けどおまえ、塾があるって……』

「それはライネがなんとかしてくるんでしょ。いい、絶